石川県七尾美術館だより

平成22年１月１日発行
編集・発行　石川県七尾美術館

第60号（冬号）

ISHIKAWA
NANAO
ART MUSEUM

石川ゆかりの作品展

～人・街・自然の風景を楽しむ～
～明治から昭和の加賀・能登の画人たち～より
「虎図」（「虎鷹図」衝立内 ）多田宅兵衛（1818～79）
呉座井由紀子氏より新寄附

展覧会紹介

平成22年1月5日（火）～
4月18日（日）
休館日については裏表紙をご覧ください

「石川ゆかりの作品展」

2月6日（土）～4月18日（日）

当館では開館以来、能登唯一の総合美術館として、能登にゆかりのある作家や作品、或いは石川県にゆかりのある作家や作品を、シリーズ的に紹介してきました。

今回は石川県ゆかりの作家や作品を、二つのテーマで紹介します。

◇第一展示室

～人・街・自然の風景を楽しむ～

古今東西、作家たちがモチーフとして選ぶテーマは様々です。今回は所蔵品より現代作家たちが制作した絵画を中心に、「人」「街」「自然」の三つのテーマで約二十点を紹介します。

一言で「人」といっても、モデルにポーズをとってもらい制作したもの、日常の中の一瞬を捉えて制作したものなど色々です。また、材質や技法によっても、持ち味が違ってきます。

「横山大観像」田中太郎

一方、「街」も色んな表情を持っています。国や地域、季節や時間帯によって、時には驚く程違う顔を見せてくれます。

さらに、「自然」は街以上に季節や天候、時間帯の違いをストレートに映し出します。作家たちは、時には自然の風景そのものを具象的に表現し、時にはその実体や特徴を抽象的に捉えて表現しています。

様々な表現で制作された「人」「街」「自然」の魅力をお楽しみください。

「アメリカンアベニュー」前田さなみ

◇第二展示室

～明治から昭和の加賀・能登の画人たち～

石川県は美術工芸の盛んな地として、全国的にも知られています。その中でゆかりの画人たちを見ると、日本水墨画の最高傑作、国宝「松林図屏風」を描いた長谷川等伯、馬の絵を得意とした富樫、虎の絵で有名な岸駒などが知られ、彼らの画業や作品は、長く人々に伝えられています。

本展では、そういった先人たちの後を引き継ぐべく、新たな時代の空気を取り入れながら制作していった、明治から昭和に加賀・能登で活躍した画人たちとその作品を紹介します。

〈主な出品予定作品〉（石川県立美術館所蔵作品より）

「一心不乱図」　高村右暁（一八六七～一九五四）

高村右暁は金沢の加賀藩狩野派絵師の家に生まれ、二十歳の時に垣内右嶙の門に入り、四条派の画家として活躍しました。宮内省の御用も受ける一方で、百人近い門下生を育て、後進の指導にも尽力しました。本図は、小坊主が一心不乱に熾しているかまどの炎の中に、不動明王が姿を現した場面で、僧侶の驚く様子がユーモラスですが、精神性を重んじた右暁らしい作品といえます。

「春秋山水図」　山田敬中（一八六八～一九三四）

山田敬中は江戸に生まれ、浮世絵師の月岡芳年、後に川端玉章に師事して円山派を学びました。日本美術院設立に参加し、明治三十一年（一八九八）から石川県立工業学校で教鞭を執り、後進の指導にあたりました。本図は春景と秋景とを描いた対幅の内春景で、人物を配してのどかな春の景色を写実的に描いています。

「鷺娘図」　北野恒富（一八八〇～一九四七）

北野恒富は金沢に生まれ、十代で南画や琳派、版下絵を学習、後に金沢出身で歌川派の稲野年恒に師事し、妖艶な美人画で注目を集めました。再興院展同人となり、金城画壇特別会員として出品

もしました。鷺娘は、五変化物の歌舞伎舞踊で、白鷺の化身である娘が、雪降る中に佇む姿は艶かしく、内に秘めた情念が伝わってくるようです。

「山の秋」　玉井敬泉（一八八九～一九六〇）

玉井敬泉は金沢の染物屋に生まれ、山田敬中・結城素明に師事、上京して文展で活躍、大正八年（一九一九）に金沢へ戻り、金城画壇で活躍しました。晩年は白山の自然保護、文化財の保存など、広く文化行政にも貢献しました。本図は、敬泉が愛した白山の秋を描いたもので、彩られた高山植物と雷鳥が、力強く且つ繊細に表現されています。

「龍田姫之図」　紺谷光俊（一八九〇～一九四五）

紺谷光俊は金沢に生まれ、高村右暁に学び、後に京都で山元春挙に師事、円山派の伝統を受け継ぎ、文展などで活躍しました。数年後に金沢へ戻り、金城画壇の役員も務め、弟子の指導にも当りました。本図は、美人画や歴史画を能くした画家らしく、紅葉したもみじと、小鳥と戯れる龍田姫が、物語性を帯びて美しい色調で描かれています。

「昏」　上田珪草（一九〇四～八五）

上田珪草は大阪に生まれ、郷倉千靭、速水御舟、小林古径に師事、再興院展などで活躍し、各賞を受賞しました。昭和二十年より夫人の郷里・能登七尾に疎開、珪草を応援する人々の援助を受け、七尾でも多くの作品を制作しました。本図は、存在感のある動物画を得意とした珪草らしく、暗闇の中で息を潜めるチーターたちの、息遣いが伝わってくるような作品です。

◇観覧料

	個人	団体
一般	500円	400円
大高生	350円	300円

※中学生以下無料・団体は20名以上です。

現在開催中！「冬季・所蔵品展」

1月31日（日）まで

◇第一・二展示室

今年の四月で当館はちょうど開館十五周年を迎えます。現在「池田コレクション」を筆頭に、約五三〇点の作品を所蔵しています。

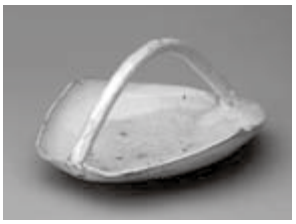
それら作品のほとんどは多くの方々よりご寄附頂いたものであり、ご好意を頂きました皆様には改めて御礼を申し上げる次第です。

多種多様な収蔵品には、その制作者や所蔵者などの様々な想いが込められています。

その大切な作品をできるだけ多くの皆様に鑑賞して頂くために定期的に開催しているのが「所蔵品展」であり、毎回テーマを設定する形で年に数回開催し、順次紹介してきました。

そして現在は「いろいろな茶道具」「はたらくひとびと」の二テーマで開催、茶道美術品や絵画、彫刻などより五十六点を展示しています。

それら色々な気持ちが凝縮された作品の数々をぜひご観覧ください。



「萩手鉢」（池田コレクション）

「老匠」八野田 博

◇観覧料

	個人	団体
一般	350円	280円
大高生	280円	220円

※中学生以下無料・団体は20名以上です。

アートホール催し物案内

ひまわり保育園 おたのしみ会 無入場料

1月17日（日）開演 午前9時45分

2歳児から5歳児による楽器演奏や歌、遊戯や劇あそび等の発表を行います。子どもたちの1年間の成長をご覧いただきたいと思います。元気いっぱいに発表いたします。

主催・連絡先 ひまわり保育園
☎0767（57）2800

TOSHIKOピアノ&リトミック教室 第4回はっぴょうかい 無入場料

2月21日（日）開演 午前10時30分

保育園児から小学生まで、1年間がんばって勉強してきた成果を発表します。どの子も昨年よりもずっと上手になりました。どなたでも、頑張っている子どもたちにあたたかい拍手をお願いします。

主催・連絡先
TOSHIKOピアノ&リトミック教室
☎0766（73）6559（藤井）

小丸山保育園 お別れ発表会 無入場料

2月27日（土）開演 午前10時

0歳児クラスから年長組までの、子どもたちの大きくなった姿を是非ごらん下さい。

特に年長組にとっては園生活最後の発表となります。皆さんのおいでをお待ち致しております。

主催・連絡先 小丸山保育園
☎0767（53）3700

大谷済美幼稚園 発表会 無入場料

2月28日（日）開演 午前9時30分

みんなで一緒に創りあげる発表会です。1人ひとりが身体いっぱいを使って表現する歌やお遊戯を通して、園児それぞれの1年間の成長を感じてください。

主催・連絡先 大谷済美幼稚園
☎0767（52）0526

※「ひまわり保育園 おたのしみ会」と「大谷済美幼稚園 発表会」につきましては、前号でお知らせした開催日から変更となりました。

美術館スタッフのひとりごと②
「等伯作品は展示していないの？」

来年はいよいよ「長谷川等伯没後400年」。ここのところ等伯に対する注目度がとみに高まっていますが、その中で当館への問い合わせとして最近特に増えているのが上のセリフです。当館は等伯を大きなテーマにしていることから、当然作品も常に展示していると思われがちなのですが、残念ながら「常設」はしていないのです。

まず最初に、現在当館が所蔵する等伯作品は3点です。

「3点を入れ替えて展示したらいいのでは？」

等伯作品はとても古く貴重な作品であることから、作品保護のために1年間に展示できる期間は長くても2ヵ月とされており、3点では半年しか展示が続きません。まして、等伯展で展示すると残りの展示可能期間は1ヵ月です。後世に最良の状態で残すために、現在長期間の展示ができないというのが第1の理由です。

「では、等伯作品がたくさんあったら？」

等伯の作品を増やすのは大変難しい、というのはここではおいといて…。第2の理由として、当館は等伯展以外の特別展も開催しています。美術館自体の施設が小さいので、大規模な企画展では全ての展示室を使用することになります。そのため、等伯作品の常設スペースを設けられないという施設としての問題があります。

従って当方としても等伯作品を常設展示したいのは山々なのですが、現状では難しいのです。中には遠方から等伯作品をお目当てに来館される方もおられ、大変申し訳ないことと思っています。

ですから等伯作品をお目当てにご来館される際は、事前に当館ホームページやお電話で展示情報をご確認頂きたく…というのが当館からのお願いです。

何やら言い訳がましい文章となってしまいましたが、何とぞご了承のほどを…。

「陳希夷睡図」長谷川信春（等伯）当館蔵

ボローニャ展報告

11月6日から1ヵ月にわたって開催した「2009イタリア・ボローニャ国際絵本原画展」。たくさんのお客様にご来場いただき、無事終了することができました。毎年、審査員が入れ替わることにより、展示作品の雰囲気もガラリと変わる展覧会ですが、今年の作品は評判がよく、「ストーリーがわかりやすい」「明るい作品が多い」などの声をいただきました。

また、関連グッズも好評で特別展示作品や入選作品・作家の絵本など多彩なラインナップが揃いました。例年のことですが、数量限定で取り扱っている人気作家のグッズは、早々と売り切れてしまい、購入を悩んでいるお客様が右を見て左を見ると既になくなっている、という状況でした。

さて、関連行事として毎年実施しています「かんたん絵本を作ろうよ！」「アニメ上映会」「ナイトミュージアム」にも多くの方にご参加いただき、賑やかに開催されました。今年初の試みである「おはなし劇場」は私たちの予想を上回る100名近くの方にお越しいただき、「ななお音絵巻」ではバラエティに富んだプログラムで盛り上がりました。

ボローニャ展に係わってくださいました大勢のボランティアスタッフの皆さんに、この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

「ボランティアぽっかぽか」さんによるエプロンシアターの様子

第10回石川県七尾美術館友の会鑑賞の旅を終えて

今回の『友の会鑑賞の旅』は昨年開通した東海北陸自動車道を利用して名古屋方面へ出かけました。早朝、薄暗い中での出発でしたが、富山湾沿いの夜明けの景色や、岐阜県付近山中の鮮やかな紅葉を楽しむことができました。

予定時刻より少し遅れて名古屋市博物館へ到着。展示説明室で小嶋学芸員から妙心寺の歴史や作品鑑賞のポイントなどをお話ししていただいた後、特別展『妙心寺　禅の心と美』を鑑賞しました。参加者の方からは、「やはり国宝『瓢鮎図』が素晴らしかった」との声や、「名品の数々が展示されている中で、長谷川等伯筆『豊干・寒山拾得図衝立』を見ると何となく心が落ち着いた」という声も聞かれました。

名古屋城近くのお食事処で、名古屋名物「ひつまぶし御膳」で腹ごしらえをした後、次の目的地、瀬戸市へ。『愛知県陶磁資料館』は市街から少し離れた緑豊かで広大な敷地の中に在り、地元ゆかりの陶磁器に関する何棟もの施設を有しています。そちらでは、特別企画展『志野・黄瀬戸・織部のデザイン』を井上館長補佐のご案内で鑑賞しました。展示作品について見どころを交え丁寧に解説して下さり、今まで以上に“美濃焼”を理解することができたのではないでしょうか。

今回も参加者皆様のご協力のもと無事旅行を終えることができました。ありがとうございました。

四月には、いよいよ没後四〇〇年特別展「長谷川等伯」鑑賞に京都へ！

楽しみですね♪

「愛知県陶磁資料館」にて

平成22年度　石川県七尾美術館 友の会会員募集のご案内

新年度友の会会員を次の要領で募集いたします。現在会員の方で更新をご希望される方は改めてお申込み下さい。お申込みのない場合はそのまま退会となってしまいますのでご注意下さい。

★入会手続き★

①受付開始　3月2日(火)から【年度会費1，000円】

②受付場所　当館受付カウンターまたは郵便受付（郵便振替用紙をご利用ください）

※郵便局備え付けの振替用紙の通信欄に必要事項《会員の区別(更新・新規・元会員)・郵便番号・住所・電話番号・氏名・生年月日》をご記入のうえ、会費を添えてもよりの郵便局窓口へお出し下さい。払込料金120円は申込者負担となります。

郵便振替口座　00710-0-50795
加入者名　石川県七尾美術館　友の会

友の会に入会すると…こんな特典があります！

その1　当館主催展覧会の観覧料が割引になります。

その2　情報満載「美術館だより」(年度内四回発行)が郵送されます。

その3　相互割引提携館主催の展覧会観覧料が割引になります。(会員本人のみ)

※相互割引提携館（石川県立美術館／石川県立歴史博物館／金沢市立中村記念美術館／石川県能登島ガラス美術館／七尾城史資料館・懐古館／能登国分寺展示館／中島お祭り資料館・伝承館／明治の館(室木家)／石川県輪島漆芸美術館／珠洲市立珠洲焼資料館）

その4　特別企画展開会式・内覧会へご招待。(無料)

その5　販売グッズが割引になります。(一部除く)

その6　喫茶室利用補助券がもらえます。(50円×3枚)

このほかにも友の会会員限定の催し、特典がありますのでぜひ更新、ご入会ください♪

等伯コーナー

長谷川等伯展講演会報告

「三つの鬼子母神十羅刹女図 ―長谷川信春の仏画とその造形―」

講師　松嶋　雅人 氏（東京国立博物館特別展室長）

それでは、三つの「鬼子母神十羅刹女図」について、お話させていただきたいと思います。

長谷川等伯は桃山時代に活躍、四十代の半ばくらいまで信春（のぶはる）という名前で活動し、信春時代は主に絵仏師として活動しておりました。元々は守護大名畠山氏の家臣・奥村宗道の息子として生まれ、まもなく縁者の長谷川家養子となり、長谷川信春として活動していました。生家の奥村家が本延寺、養子先の長谷川家も長壽寺と、それぞれ日蓮宗のお寺で、等伯自身も熱心な法華経信者であったわけです。

信春が描いた「鬼子母神十羅刹女図」は、富山県高岡市の大法寺、富山市の妙傳寺、新潟県三条市の本条寺と、三点知られるようになりました。今日はこの三つの「鬼子母神十羅刹女図」に、どの様な表現がなされているかを見ていただければと思います。最後には、絵仏師としての信春の仏画が、晩年の水墨画の代表作や、金碧の著色絵画などに、どういう風に関係しているのか、少しお話できればと考えております。

まず、大法寺本の画面には「永禄七年」とあり、等伯二十六歳の制作と分かります。藍地で、色の配色の綺麗な画面です。上部に南無妙法蓮華経の七文字が記され、鬼子母神が右上に立っています。法華経では、鬼子母神は法華経信者を守護するといわれ、日蓮宗のお寺によく祀られています。八十センチ程の画面ですが、冠の文様、法衣なども大層細かく明確に描かれています。そういう緻密な描かれ方、表現方法も、絵仏師として活動していた信春時代の特徴の一つです。左手で赤子を抱き、右手に吉祥果の実を持っています。その左に鬼子母神の配偶者の半支迦大将が立ち、この下に十人の羅刹女が立っています。元々鬼子母神と

十羅刹女は別種の神様ですが、日本の色んな信仰の形で祀られる中で、その意味合いが変化し、母子関係があるように見做されるようになったわけです。

十羅刹形様という、十羅刹女の形態を説明したお経があり、精通した時代が中国の宋時代、十三世紀くらいだったかと思います。本来、仏教絵画はお経に添った形で描かれますが、若干その形態が食い違う部分もあります。時代、地域、宗派ごとに色んな解釈がされ、それぞれ解釈した方法によって、形が作られたということだと思います。まず、藍婆、二番目に毘藍婆、三番目は曲歯、その下に華歯、次は黒歯で、次に多髪という羅刹。その下の七番目に無厭足、八番目は持瓔珞、九番目に皐諦、十番目に奪一切衆生精気という羅刹です。元々あったお経に、ある部分では当てはまった状態で描かれていますが、描かれた時代の法華経の解釈で、様々な形が描かれていると思います。

画像一番下の左に、信春時代に使われた袋形の判子が捺され、画面の右に「むねきよ」、或いは「そうせい」という判子がございます。宗清というのは、長谷川家の養父の名前です。通常、日本絵画の場合、二人の判子が捺されている場合は大体合作を意味します。宗清も恐らく画家、絵仏師として活動していたと見て、合作とも考えられますし、二人とも法華宗信者ですので、父も仏縁に授かろうと、自分の判子を捺したと解釈される場合もございます。私個人としては、父と子の合作ではないかと考えているところです。左には、「永禄七甲子奉図之日恵」と年紀が記されております。この日恵が、プロデューサーとして信春にこの画像を描かせ、お寺に収めたという意味合いの文章です。

さて、二番目は富山市にある日蓮宗の妙傳寺所蔵の画像です。赤い顔料などを見た瞬間に、信春画に近いと思ったわけです。正面を向いて左手に赤子を抱き、右手に吉祥果が茎の部分だけ見えます。かなり画面が磨耗し、特に鬼子母神のお顔の部分だけ擦り減っています。先代のご住職は、「昔は郡部の方にお像を持ち出し、お講というかたちで仏事をしていたはず。女性の方々から強い信仰を受けて、ご利益に与ろうとして画像に直接手で触れていたのではないか」とおっしゃっておられました。大法寺本では、画面一番上に鬼子母神と半支迦大将が立ち、その間に一番目の藍婆、毘藍婆と上から順に描かれています。妙傳寺本の方は、画面の一番下に藍婆と毘藍婆が立っています。こちらも顔料は摩滅していますが、金の武装、鎧の文様、冠は大変きれいに残っており、その左右に華歯と黒歯が立っています。三番目が曲歯、七番目の無厭足は、妙傳寺本では画帖を持っているかと思います。で、無厭足の上に、持瓔珞が描かれていて、手の表情はとりわけ優しげな表情です。こちらの羅刹の鎧や冠の金泥で描いた細かさも、大変技術の高い描写力と思います。この妙傳寺本は、銅環が描かれた下に朱が塗られ、その上に金泥、金の絵の具が塗られていました。桃山時代、江戸時代に描かれた日本の絵画で、時々見かける技法です。朱を下地として塗り、その上に金を塗りますと、その金の輝きが増します。そういう手の込んだ技法を使うのは、そのお像が緻密に計画されて、沢山のお金をかけて作られたということでございます。その多髪の上に皐諦、その上に十人奮一切衆生精氣が順番に描かれています。大法寺本の十羅刹女の名前の順番と、こちらとでは違います。羅刹女の名前は、この画像制作を依頼したお坊さんの字です。元々、描かれた時の順番は等伯だと思いますが、そのお坊さんが「この順番で描きなさい」と指示したのか、或いは等伯が描いた後に、そのお坊さんが名前を書いたので順番が狂っているのか、明確にはできませんが順番が違います。

大変興味深いのは、手を合わせて祈願をしている女性の像が、一番下に描かれています。恐らく妙傳寺の有力な檀家さんで、この画像の、経済的に大きなバックアップをした人の一人だと思います。画面右に、「長谷川信春」の署名と赤い判子が捺されています。「元亀二辛未　霜月十九日」という年紀も記されています。仏画が完成された時に、開眼供養をするという法事がございますが、その日を記していると思います。実は、この元亀二年は等伯が三十三歳の時で、この年に養父母を相次いで亡くしています。鬼子母神という母と子の神様を描いた仏画で、信春自身も法華宗の篤い信仰者でしたので、養父母を亡くした部分、そういった想いも特に強く表れている仏画ではないかと、個人的には思っているわけです。画面右端に「妙傳寺常住　主日敬」と、これは妙傳寺の備品で、その主は日敬だと書いています。日敬はこの妙傳寺の第三代住職で、この画像が発見される以前にも知られています。

こちらは、日蓮宗の本山・羽咋の妙成寺所蔵の、等伯筆「日乗上人像」です。日乗上人は、「二世日乗」とあるように妙成寺の第二世です。画像の一番下に「日敬寄進」と書かれ、左には墨で「道浄子息」と、四角い判子で「信春」と書いています。この肖像画を描いたのが信春で、この字を記したのは日敬自身です。道浄というのは、宗清という等伯の養父の法名です。日敬は等伯のお父さんも知っていて、その息子だと書いているわけです。そういった日敬との繋がりと縁もあって、信春は妙傳寺の仏画を描いていることが分かるわけです。仏蔵院日敬という人物は、富山市の妙傳寺の第三代住職で、高岡市の妙伝寺の第三世でもあります。また、金沢市寺町の妙典寺の開山、先程の妙成寺を本寺とする、羽咋の妙法寺の第六代住職です。上から三つは、恐らく妙伝寺が枝分かれして現在に至る、京都本圀寺の末寺です。この様に、日敬は北陸能登、富山を中心として、大変活動していたことがわかります。こういう人々が、お寺の什宝を充実させるために、信春、長谷川家の人々に依頼して、仏画が描かれているという活動が分かるわけです。

三つ目は、新潟県三条市の法華宗陣門流本山の本成寺で、二〇〇七年に拝見して信春の判子が確認でき、立て続けに信春の作品が世に現れたということになったんです。鬼子母神の上に、「南無妙法蓮華経」の七文字を記しています。妙傳寺本と同じ部分も大変多いですが、署名はなく判子だけ捺されています。画像の裏面に貼られた修理の記録に、「芸師御開眼　為後代書記」とあります。本成寺第十二代住職で、日芸という僧侶（一五三〇～一六〇〇年）がおり、この画像を開眼したと。

等伯が活躍していた時期とほぼ同じ年代で、辻褄は合っているわけです。高岡市・大法寺のご住職のお話しですが、日芸上人は、元々能登阿奢利といわれ、能登の出身者であることが明確だということです。日芸上人が開眼供養し、等伯にこの画像を依頼したと考えますと、能登で信春に制作させたものを本成寺に寄進した、或いは日芸上人が自分のためのお像として、そのままお持ちになったとも考えられるわけです。

本成寺本と妙傳寺本を並べると、妙傳寺の方は鬼子母神の上に日天子、月天子、明星天子の三光天子が描かれていますが、本成寺の方には七文字が記されています。鬼子母神は両方台に乗っていて、妙傳寺本の十羅刹女も全員台に乗っていますが、本成寺本は台に乗らず空中に浮かんでいます。鬼子母神を比較すると、赤い布の文様、冠の形、装飾はかなり近く、藍婆と華歯は色の配置が少し異なっていますが、お顔の表情だとか姿勢は、ほぼ同じに描かれています。日本、東洋の絵画というのは、粉本という絵を描くための下絵、参考図を使って制作されます。絵を描く時の一番大きな基準は、決まった画題を決まった形で描かないといけません。仏教絵画は、特に仏事で使いますので、画家が勝手に形や位置関係、色を変えて描くことはできません。そのため、前の時代の作品絵画を写します。等伯も粉本をたくさん持ち、先人の画家たちが描いた作品を学び、それを描きためます。例えば日恵上人、或いは日敬上人が、信春に描くことを依頼します。「この画像を使って描きましょう」と指示を受けて、信春は持っている参考図、或いはその参考図自体を提示されて描いたこともあると思います。そういったことで、ほぼ同じ画像として表れてくるわけです。

もう一つ、羽咋にある真言宗の正覚院に、「十二天像」があります。その中の毘沙門天です。「信春」の印があり、二十六歳の時の絵です。日蓮宗である高岡市・大法寺の鬼子母神の夫・半支迦大将と、真言宗のお寺で祀られる十二天の内の毘沙門天が、ほとんど同じ顔形で描かれています。これは、描いた時に何らかの理由で参考図、下絵になったものが共通して使われているということです。そういいながらも、大法寺本と妙傳寺本は、若干向きが違います。それぞれのお寺の描き方、表現の仕方が違うところも見られるわけです。

曲歯を大法寺本と妙傳寺本と比べてみますと、若干お顔の表情としぐさも違う。これを粉本、参考図の元々の違いとして見るのか、親子合作の時の違いとして表れたのか、色々な関係を想像できるわけですが、まず、粉本、参考図の違いがいえます。その他に、制作意図の違い、大法寺のプロデュースをした日恵上人、妙傳寺の住職・日敬上人の制作意図の違い、その辺りが違う画像として大きく表れたと思います。

最後になりましたが、これは妙心寺龍泉庵の「枯木猿猴図」です。この絵が、参考にしたであろう作品が、牧谿の描いた「観音猿鶴図」の猿の図です。二つの猿の図を並べてみますと、猿の親子の関係は同じで、猿の体毛の柔らかさとかはでていますが、等伯の枝の輪郭線が、牧谿よりスピード感、力強さが増していると思います。また、牧谿は画面地に薄墨を流して描いていますが、等伯は画面地に金泥を刷いています。牧谿の方は、木の後に空気感、存在感があり、リアリズムといいますか、実際に目にできるような形態、表現方法です。等伯の方は、力強い水墨の線と柔らかい体毛で、猿と木の存在感をより強めようとした、その違いがあると思います。等伯は空気感が描けないという見方もありますが、それよりも、等伯の目指したものがどういったものかを考えた方がいいと思うんです。

例えば、狩野永徳の大徳寺聚光院の襖絵「花鳥図」はかなり図式的、説明的ですが、近い景色、中景、遠景を組み合わせて、画面の中に遠近感、距離感を作ろうとしています。金箔を画面全体に貼り付けて描いた唐獅子の絵も、実際に画面のそれぞれの事物、モチーフを描いて、存在感、遠近感を表すような描き方です。

こちらが、豊臣秀吉の嫡子・棄丸の供養のために建立された祥雲寺の障壁画で、等伯の着色画の代表作「楓図」です。それが今、智積院に残っているわけです。楓の大木と秋草など、豪華絢爛に描かれています。これを見ると、永徳の「唐獅子屏風」と違って、この金箔で貼られた画面地と、切り取られたような楓図、秋草が金地に貼り付けられたような状態で目に映るわけです。妙傳寺の鬼子母神は、紺地の背景にそれぞれ神々が描かれて、神々を強調するための描き方です。仏画はほとんどの場合が仏の世界、現実の世界ではない空間が描かれているわけです。遠近感や場面設定、そういったものは描かれません。もう一度「楓図」を見ますと、供養するためのお寺の、黄金の空間の中に秋草と描かれた楓図ですが、そういった意味でいうと、現実の楓や秋草を彷彿させる、現実空間をイメージさせるよりも、黄金空間という仏の世界に、豪華絢爛に咲き誇っている秋草を示すために、等伯が信春時代に培った仏画の描写方法、表現方法を使って描いたというふうに、私自身は考えているところです。

一方、ご存知の「松林図屏風」は、全面に空気が流れて、濃い墨で描かれた部分と、薄い墨で描かれた松、雪をかぶった遠山が描かれていて、広大な空間と遠近感というものが感じられます。それが近寄ってみますと、非常に強い筆先の動きで描かれています。強い調子で描かれていながら、展示室の光の状態で見ますと、本当に薄っすらとした陽光、太陽の光で浮かび上がってくる。こういう松の林も描くと。仏画的な障壁画、或いは水墨画でこういう空気感、遠近感、湿った空気、そういったものも描くことのできる長谷川等伯、両方の素晴らしい画技、力を持った画家であるというのを、つくづく思うところであります。

来る二〇一〇年二月二十三日から三月二十二日まで東京国立博物館で、次いで京都国立博物館では四月十日から五月九日まで、没後四〇〇年を節目に特別展「長谷川等伯展」が開催されます。是非共ご来館いただけるように、よろしくお願いいたします。ご清聴ありがとうございました。

（※本文は平成二十一年四月二十九日に行われた記念講演会の内容を、当館の責任においてまとめたものです）

平成22年度 春の特別展予定

◆第１・２・３展示室

長谷川等伯没後400年記念事業・開館15周年記念

「等伯をめぐる画家たち」（仮称）

平成22年4月24日（土）～5月30日（日）会期中無休

慶長15年（1610）に長谷川等伯が江戸で没してから今年でちょうど400年、平成22年は大きな節目の年であり、東京・京都の両国立博物館で近年稀にみる大規模な「長谷川等伯展」が開催されるなど、等伯への注目度が高まっています。

そこで当館では今回、「等伯の故郷ならでは」の企画として、現在も石川県内に多く伝来する「等伯をめぐる画家たち」が関連している作品に焦点を当て、若き等伯が参考にしたとされる仏画や、等伯４番目の息子である長谷川左近、能登の長谷川派絵師・長谷川等誉といった、地元に足跡を残している「長谷川派」の作品などを展示します。また、等伯が活躍した桃山時代の絢爛豪華な文化を象徴する「長谷川派」一門による金壁障壁画もあわせて展示し、「長谷川派」の幅広い画業を紹介いたします。

重要文化財「桜・鉾杉図襖」（４面内３面） 長谷川派筆　京都府 妙蓮寺蔵

「出山釈迦図」 長谷川等誉筆
東京都 國土安穏寺蔵

平成22年度　市民ギャラリー＆アートホールの利用申込みについて

七尾美術館では個展、グループ展、演奏会などの幅広い芸術活動の発表の場として市民ギャラリーとアートホールの貸室を行っています。平成22年４月からのご利用については、１月５日(火)～24日（日）を第1次募集期間として受付けします。当館主催事業の関係上、ご利用いただくことのできない期間もありますので、詳しくは七尾美術館までお問い合わせください。【利用可能期間は当館ホームページでも確認できます】

プレミアム・パスポート PREMIUM PASS 子育てにやさしい店

割引、プレゼントなど特典いろいろ！
ぜひ当館でもご利用ください。

飛行機……能登空港から能登有料道路利用約45分
車……金沢から能登有料道路利用約１時間15分
タクシー…JR七尾駅から約５分
徒歩……JR七尾駅から約20分
市内循環バスまりん号
…JR七尾駅前「ミナ．クル」ビル裏バス停から西回り「七尾美術館前」下車
ななおコミュニティバスぐるっと7
…JR七尾駅５番乗り場から西コース「小丸山台１丁目」下車

休館日のお知らせ

（1月～3月）

◆1月　1～4、12、18、25
◆2月　1～5、8、12、15、22
◆3月　1、8、15、23、29

◎次号・第61号（春号）は4月1日発行予定です。

〒926-0855　石川県七尾市小丸山台１丁目１番地
TEL(0767)53-1500 ／ FAX(0767)53-6262
http://www.city.nanao.lg.jp/nanabi/